

# 歴史を語る建物たち

秋田編  
(第3回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## 十和田ホテル (小坂町)



青森県と秋田県にまたがる十和田湖の、秋田県側湖畔に、木造3階建てのホテルが建っている。昭和14年に開業した十和田ホテルで、国の登録有形文化財および近代産業遺産に指定されている。

### 国策で建てられた県営ホテル

昭和11年、次期オリンピック（昭和15年）の開催地が東京に決まると、国は東京をはじめ、全国のリゾート地にも外国人観光客用の宿泊施設を整備した。十和田ホテルはその1つであり、国の要請を受けて秋田県が建設した。なぜ十和田湖畔がホテル建設地に選ばれたのかは不明であるが、昭和11年に十和田地域が国立公園に指定されたこと、また当時の秋田県知事が県の観光開発に熱心であったことと無関係ではないと推測される。

建設にあたっては、青森、岩手、宮城の3県から約80名の宮大工が集められた。釘を1本も使わない技法や、玄関吹き抜けなどに施された意匠は、戦時体制にあって仕事の場が少なくなっていた宮大工たちにとって、格好の“腕の見せ所”であった。

また、祝典の花火とともに行われた竣工式には県内外の要人が集まり、ホテル従業員は前夜から一睡も取らずに準備に忙殺されたと、当時の鹿角時報が伝えている。

しかし、昭和13年に東京オリンピックが中止になったことから、開業早々経営が困難になり、昭和15年に、



開業時の十和田ホテル。宮大工の技術の粋が結集した。出典：郷土出版社『大館・鹿角・北秋田の今昔』

秋田県は鉄道省（当時）に十和田ホテルの経営を移管した。鉄道省では、ホテルを鉄道職員の保養、錬成の場所として使用していた。

戦後は進駐軍に接収されたが、サンフランシスコ講和条約（昭和26年）翌年の昭和27年に秋田県が買い戻し、県営、県観光公社（当時）の経営を経て、現在は秋田県が40%を出資する第三セクターによって経営が行われている。

### 十和田湖は庭の一部

十和田ホテルはどの部屋からも十和田湖が見えるように設計されている。また、高台にあるため、庭から見ると十和田湖も大変美しい。

昭和36年の秋田国体に来られた昭和天皇・皇后両陛下は、秋の十和田湖をご探勝された後、十和田ホテルに宿を取られた。陛下ご自身が、先導の小坂町長に「十和田ホテルはどこですか」とおたずねになったと『小坂町誌』に記載されていることから、ホテルからの景色が美しいことを事前にご存じであったのかもしれない。事実、十和田ホテルの庭におそろいでお立ちになった両陛下は、湖の景観がことのほかお気に召したご様子で、町誌によればご出発の時間が5分ほど遅れたそうである。

十和田ホテルに宿泊して俳句や短歌を詠んだ文人も多い。十和田湖に遊んだ俳人・石原八束（1919-1998）は、句集『秋風琴』で「七瀧村鉛山-十和田ホテル、三句」と前書きした句を記している。なお、七瀧村は現在の小坂町、鉛山はホテルのある湖畔西側の地名である。

また、斎藤茂吉に師事した歌人・佐藤佐太郎（1909-1987）も十和田ホテルに投宿し、部屋の窓や庭から十和田湖を眺めながら多くの短歌を詠んだ。それらは歌集『地表』に収められている。

十和田湖は、ホテルの庭の借景のごとく、今なお十和田ホテルを訪れる多くの人びとを魅了している。

### 大改修に技の匠が再度集結

創業から半世紀以上にわたり「秋田杉の館」「東北の迎賓館」と親しまれてきた十和田ホテルは、平成に入ると、建物の老朽化によって解体も検討される危機に立たされた。しかし、ホテルの歴史的、文化的価値を評価し、保存を望む声が多く寄せられたことから、秋田県ではホテルの保存修復を決定し、平成8年から平成10年にかけて、全面的な改修工事が行われた。

ここでも、腕に覚えのある大工が、東北を中心に各地から集まった。客室の保存修復では、一つの部屋を一人の大工が最初から最後まで担当し、建築当時の技を再現した。秋田県発行『秋田杉の館 十和田ホテル再生の記録』には、部屋ごとに工事を担当した大工の名前が記載されているが、その名前がすべて異なっているのは驚きだ。

また、木造柱で支えられていた地下部分は、土台を強化するために鉄骨柱に変更した。上階の建物修復に影響が出ないように、施工は入念に行われた。狭く暗い空間での鉄骨取り付けに活躍したのは、古くから鉱山の町として知られる地元小坂町で坑内作業の経験を持つ職人たちであった。

こうして、往時の姿そのままに生まれ変わった十和田ホテルは、東北地方随一のクラシックホテルとして、現在も多くのファンから愛されている。

### すべては「建物を守る」ために

十和田ホテルは、その伝統と格式、内装のすばらしさから、国際会議やドラマのロケなどに使われることもあるが、最近ほとんど断っているという。その理由について、ホテルの代表取締役を務める菊池勇咲社長は「一般のお客さまのため」と話す。

「私たちの一番の使命はこの建物を守ることです。そのためには、一般のお客さまに満足いただけるサービスを提供することで宿泊客を増やし、経営の安定化を図らなければなりません。大きな会議やロケなどは一般のお客さまにご迷惑をかけるので、かえってマイナスなのです」（菊池社長）

また、現在でも政財界の大物や高名な芸術家などが投宿するというが、菊池社長は「そうした方々も一般のお客さまの一人です。気持ちよく滞在してもらうために過度なもてなしはしません」と言い切る。

ところで、昨年発生した東日本大震災では、先の改修工事のおかげで建物自体には被害がなかったものの、風評被害などで客足が遠のき、約1ヶ月の休業を余儀なくされた。本来は通年営業であるところ、昨年11月中旬から今年4月下旬までも休業している。しかし、休業中も空調管理や掃除、除雪は怠らず、日直・宿直と必ず誰かスタッフは常駐している。筆者が取材した日は社長自らが宿直明けであった。

「建物は使わなければ傷みます。ですから、休業中であってもメンテナンスは欠かせません。確かに大変ですが、建物を守るためには必要なのです」と語る菊池社長の口調からは、建物に対する深い畏敬の念が感じられた。

（フィデア総合研究所・山口泰史）



玄関奥の壁にある金庫（現在は未使用）。改修前は金庫の前にフロントがあった。フロアの奥に金庫を構えることは一瞬のステータスであったという。（筆者撮影）